

# 貿易データ解説

伊藤 匡

## ● はじめに

貿易データは、数ある統計のなかでも、膨大な量のデータが比較的正確に蓄積されている。多くの国、多くの品目、長い期間を網羅している。その意味で、様々な分析が詳細なレベルで可能であるという利点を有している。本稿では、同データの種類、特徴、を解説し、それらを使った分析についてその概要を紹介する。

## ● 貿易データのコード、集計、公表

貿易データの財コードは、六桁にて国際的に統一されており、輸出、輸入共に同一の財には同一の六桁コードが与えられている。これは、英語で Harmonized System (HS) code と呼ばれ、一般に HSコードと略されて表記される。財分類は、二桁、四桁、六

桁となっており、六桁コードの総数は、約五〇〇〇に上る。また、世界の技術や需要の変化に対応するべく、国際統一コードは約四年毎に改訂されている。各国は、独自に六桁よりも更に細かい財コードを付して、輸出、輸入を記録している。例えば、日本は六桁の国際統一財コードのなかで更に細分化し九桁にて記録、アメリカは一〇桁にて記録している。六桁よりも更に細分化されているこれらのコードは、輸出と輸入とは必ずしも一致しない。これらの貿易データは国際連合に報告され、国際連合統計局が加盟国から報告された同貿易データを六桁コードのレベルで公表している。UN Comtrade (参考URL①)より、ダウンロードが可能である。UN Comtrade 提供のデータには、輸出入額、輸出入数量、

数量単位、輸出入先が含まれている。年累計のデータのみ提供されている。一方、先進国を中心に一部の国も自国の通関統計データを公表している。例えば、日本は通関の所轄官庁である財務省が毎月のデータを九桁にて公表、税関別の輸出入実績も同九桁にて公表している。アメリカも欧州連合も同様にデータを公表している。アメリカのデータは USA trade online より購読可能である。このうち一部のデータは、The Centre for International Data から入手可能である。(参考URL②) 欧州連合も、Eurostatにて公表している(参考URL③)。

## ● その他の貿易データコード

HSコードは、最も古いデータで一九八八年から利用可能である。利用可能な年は、国ごとに異なる。HSコードの他に多く利用されているコードに Standard International Trade Classification (SITC)コードがある。同コードは、一桁、二桁、三桁、四桁、五桁から成り、五桁でのコード総数は約一二〇〇である。SITCコードでの貿易データは、最も古いもので一九六二年から利用可能である。HSコードと同様に利用可能な年は、国により異なる。同コードでの貿易データも前述の UN Comtrade よりダウンロード可能である。

## ● コードの使い分け

貿易研究者は、この二つのコードを使い分けている。SITCコードは、主に二つの特徴を有している。ひとつめは、データ利用可能な年数が長いこと(一九六〇年代にまで遡ることができる)。二つめは、生産の際に使用される原料や中間財、生産工程のプロセス、製品の用途などを考慮しているコードであること。この二つの特徴より、貿易構造の変化を探る際に多く用いられている。一方で、HSコードの特徴は、実際の輸出入財に非常に近いレベルでのデータである点である。よって、財に

注目した分析に適している。また、HSコードの細分類を利用することにより、関税の軽減や撤廃の貿易へのインパクトを正確に分析することができる。というのも、例えば同一四桁のなかの六桁分類でも関税率が大幅に異なることがあるからである。所謂「センシティブ品目」（先進国では、農産品や繊維など）にその傾向があることが知られている。

### ●産業分類コードなどの連結

グローバル化のインパクトなど、様々な貿易関連の分析をする際には、往々にして生産データや外国直接投資データなどその他のデータとの相関関係や因果関係が研究対象になる。例えば、貿易自由化による輸入の増加が国内生産額の減少をともなっているのか、または外国への直接投資と輸出との代替性や補完性などである。これらのデータは貿易コードでは集計されておらず、産業コードで集計されている。代表的な産業コードが「International Standard Industrial Classification (ISIC C)コード」である。よって、分析の際には、貿易データコードとこれらその他のコードとの連結が必

要になってくる。連結表は、前出のUN Comtradeが提供している(参考URL④)。また、その他の連結コード表はPeter K. Schottなどによっても提供されている(参考URL⑤)。

### ●貿易データを利用した研究

最も広く行われているのが、重量モデル(Gravity model)と呼ばれる推定モデルである。二国間の貿易を被説明変数として、二国間の距離や共通言語使用の有無、自由貿易協定の有無などを説明変数として、回帰分析を行うものである。重量モデルは、一般的に推定結果が高い決定係数を示すことが多く明快な結果が得られることより広く用いられている。近年では、重量モデルも計量経済学の進展と共に洗練化されており、様々な手法が提唱されている。最新の手法については、Keith HeadとThierry Mayerによる「Gravity Equations: Workhorse, Toolkit, and Cookbook」(Handbook of International Economics, edited by Gopinath, Helpman and Rogoffに所収)が詳細に解説している。二国間の貿易の要因分析の他にも、貿易額を貿易数量で割ること

により単価を計算し、その単価の推移や比較、単価の差の説明をGravity modelで分析することなども近年は行われている。また、中国など発展途上国の貿易額増加にともなう、産業内貿易(同一産業内の財を同一の国同士が貿易する)の増加や質の変化を研究対象とする産業内貿易指数(グループ・ロイド指数とも呼ばれる)による分析は、一九七〇年代より行われている。更には、近年盛んに行われているサプライ・チェーンに関する研究では、国内の産業間投入・産出を表している産業連関表と貿易データを連結した、国際産業連関表などが使われている。欧州諸国を中心に世界の主要国を一九九五年から網羅したWorld Input Output Database(参考URL⑥)やアジア諸国の国際産業連関をより詳細な産業分類で一九八五年より網羅しているアジア国際産業連関表(参考URL⑦)が利用可能である。

(ごとう) ただし/アジア経済研究所 技術革新・成長研究グループ(長)

《参考URL》

- ① <http://comtrade.un.org/>
- ② <http://cidecon.ucdavis.edu/>
- ③ <http://epp.eurostat.ec.europa.eu/portal/page/portal/eurostat/home/>
- ④ <http://unstats.un.org/unsd/cr/registry/reghd.asp?lg=1>
- ⑤ [http://faculty.som.yale.edu/peterschott/sub\\_international.htm](http://faculty.som.yale.edu/peterschott/sub_international.htm)
- ⑥ [http://www.wiod.org/new\\_site/home.htm](http://www.wiod.org/new_site/home.htm)
- ⑦ <http://www.ide.go.jp/Japanese/Data/fo/index.html>

